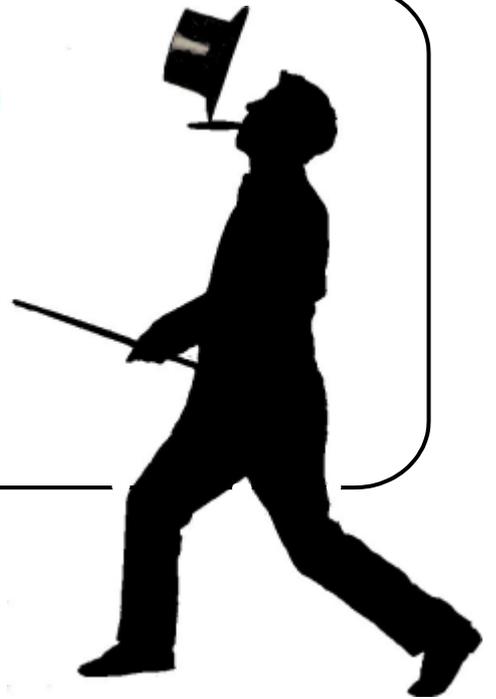


ジャグパル

JugPal

2004年10月2日 第25号



サイバー・インタビュー

【 さくら組 】

今回は旦那様も奥様もパフォーマーという珍しい夫婦ユニット“さくら組(旦那様がDr.ニヤートン、奥様がクーピー)”(註1)のお二人にお話をお伺いしました。

私がクーピーさんに初めてお会いしたのは、1995年の天保山ワールドパフォーマンスフェスティバル(註2)に無謀なことにコンテストとして出場した時でした。それ以来クーピーさんとは地理的に離れていることもありお会いしておりませんが、ニヤートンさんと結婚された後のお二人のご活躍はお二人のWebサイト上で拝見しておりました。

今回のインタビューは、何回も何回もメールのやりとりをお二人とさせていただきまとめ上げたものです。



さくら組 (Dr.ニヤートンさんとクーピーさん)

芸人になられたきっかけと、その後の活動における転機についてお話し下さいますか。

(クーピー)

私が芸人をするようになったきっかけは、ずいぶん前ですがACC(註3)のサーカス合宿に参加し、その合宿でパントマイムの不思議さとクラウンの面白さに惹かれたことですね。

合宿後、パントマイムの教室に通いだしてそのうちイベントなどにも出演していきました。大学を卒業して就職活動も一応したのですが、希望していた映像関係の仕事には就けず、ある会社の営業の仕事しながら土日にパフォーマンスのイベントに出演していましたが、社会の荒波は厳しくてわずか2ヶ月で会社を辞めてしまいました。

その後2年くらいは一般事務やアルバイトをしながらイベントの仕事をする状態でした。会社勤めはやはり長続きせず会社を転々としたのですが、パフォーマンスの仕事はやめずにずっと続けていました。やっぱり好きだから続けられたのだと思います。その後パントマイムの先生の事務所に所属してパフォーマンス一本でやっていきました。

あと大きな転機といえばやっぱりニヤートンに出会えたことですね。それまでジャグリングの存在すら知らなかったのですから…。

ニヤートンのおかげでジャグリングも上達したし、IJA(註4)にも行ったし、JJF(註5)にもゲストで参加することができましたし、結婚してユニットも組めることができました。ニヤートンと出会ってなかったら、たぶんジャグリングは今ほどできていないと思います。(笑)

(ニヤートン)

僕は中学から高校まで器械体操をしていて、大学では器械体操部がなかったので、トランポリン部に入部して活動していましたが、半月板損傷をして以来、浪人生の時に勉強の合間に息抜きとして始めたジャグリングの方を真剣に練習するようになりました。

大学4年生の時、神戸のハーバーランド(註6)のモザイク大道芸人コンテストに出場しアマチュア部門で優勝し、そのコンテストを主催したイベント会社にスカウトされて、その会社の所属芸人としてスタートすることになりました。

その後、会社を辞めフリーになり、まず、静岡大道芸ワールドカップ(註7)に出場しましたが、大道芸というのは結局、芸の技術だけを評価されるものではないことに気づきました。

自分としては得意種目やオリジナル演目の技術的な部分での評価が欲しかったので、JJAのチャンピオンシップやJJFのチャンピオンシップに挑戦したりしました。JJFでは優勝することができ、次の具体的な目標として、ジャグリングやアクロバットを含めた曲芸のショーを30分でどれくらいレベルの高いものにできるかどうかにこだわることになりました。

さらに本物の曲芸と言えるレベルにしようと思い、ラッキー師匠(註8)のもとで芸を伝授して頂くことにしました。これが大きなひとつの転機といえるでしょう。

なぜ太神楽曲芸を起点とされているラッキー師匠に習うことにしたのですか。

(ニヤートン)

ラッキー師匠は太神楽、ジャグリングそしてアクロバットの全てを洗練された領域にまで極められております。

僕もジャグリングとアクロバットのショーをやっており、両方ともレベルの高いショーにしたいと思っていますが、日本では、こういう両方の異なった曲芸に力を入れている人は少ないようです。どちらか一方のレベルが高くて、もう一方は中途半端なレベルになってしまうことが多いと思います。

ラッキー師匠の芸を拝見させて頂くと、決して楽しくて練習して上手くなったレベルの芸ではなく、どちらかと言えば、苦しんで極められた芸であることを感じさせてくれます。

僕も趣味から始めたので、どうしても苦しんだ練習には完全には耐えられなくて、まだまだ中途半端なレベルですが、自分の目指す方向は、師匠のスタイルにちょっとでも近づくことであり、何か共鳴するものを感じています。

ラッキー師匠の全盛期のお話をお聞きますと、日本では今も昔も曲芸で師匠にかなう人はいないと思いますし、僕もそういうアクロバットとジャグリングを両方極めた達人になりたいので、ラッキー師匠につくことにしました。

それと、僕は自分にしかできない神技のようなものがあれば、もっと他の芸人と差をつけられると思っています。

それは、芸のオリジナリティということでしょうか。

(ニヤートン)

師匠は、土瓶の芸では日本一で、しかも“つる立て”という師匠にしかできない神技をお持ちです。

僕も自分しかやっていないアクロバティック皿回しという演目を開発しましたが、これは体が柔らかければ、他の人にできてしまうという危険性があり、まだまだ神技の領域ではありません。

今、具体的に何を練習すれば、神技に近いレベルの技を会得できるのか分かりませんが、師匠のところにいるうちに何かヒントが見つかるのではないかと思います。

オリジナリティということでは例えば、現在一般的なジャグリングでは、5本クラブなどをショーでやる人が増えました。5本クラブは確かに難しいと思いますが、逆にそんなにできる人がいるということは、ある程度練習すればできるレベルなんだ！と思うこともできます。こんなことを言うと僕は5本クラブができないので、5本クラブができる人に怒られますね。(笑)

でも、本当に難しい技を極めた人なら、そう何人もできる人がいないはずで、僕の場合、人と違うことをやって、凄いとされたかったので、あえて5本クラブは練習しませんでした。

それから、ラッキー師匠から伝授される芸は、もともと師匠がやって今はやられなくなった芸も伝授されたりするので、自動的に現在、日本では自分しかやっていない技を会得したことになります。

その結果、同じ曲芸でも他の芸人さんのショーと自分のショーはさらに違うものであるということになります。だから、師匠のところに通って、一般的なジャグリングと違った珍しい芸も身につけましたし、いい勉強になっています。

ラッキー師匠に関するエピソードをこっそり教えて下さい。

(ニヤートン)

師匠はアクロバットを身につけ、ラッキートリオでやってらっしゃった時、日本では自分達が一番だ！というくらい天狗になっておられたそうです。

ある時、海外から指折りのジャグラーが来るというので、その演技を觀られたそうですが、そのジャグラーはなんと、一輪車に乗りながら、片手でリングを3枚ジャグリングし、もう一方の手で2段のスピニングボールを回し、マウスピースでもスピニングボールを回し、さらにおでこで棒をバランスしながらスピニングボールを回し、片足でリングを回すという信じられない芸をこなしていたそうです。

師匠はそれを見て天狗の鼻が折られた気分になり、それから師匠はその外人がやっていた洋物のジャグリング(スピニングボール、ローラーポラー、くわえばちのボール芸など)を勉強されたそうです。

……実はこの話を3回くらい喫茶店行くたびに聞かされました。(笑)

師匠にとって、さらに曲芸に磨きがかかったのは、このことがあったからなんだ！というのがよくわかりますし、私たちの芸もさらに磨きがかかったのは、そういう師匠のところに通ってからです。

さくら組さんの仰る曲芸とは何を意味するのでしょうか。

(ニヤートン)

「曲芸」とは辞書で調べると、「人をあっといわせるような芸当。かるわざ。」と書いてあります。だから普通の人には真似のできないような非日常的な行動で、だからこそお客さんはそういう見たことのない行動に驚きます。

ただ曲芸というと、漢字のイメージが強く、日本の太神楽とか軽業だけに限定する人もいますが、僕は例えば道具を使うジャグリングや身体だけで表現するアクロバットなども洋物の曲芸だと思います。

ただあっと言わせる芸当でも、マジックやパントマイムやダンスなどは曲芸の定義に外れるかと思えます。

マジックはネタがあり、それをお客さんに気づかれないようにして、その不思議さに驚かされるというものです。

またダンスやパントマイムは身体だけで表現しますが、確実な技を決めて人を驚かすというのではなく、技があっても流れるようなリズムで見るものなので、お客さんは演技が終わるまでぼーっと見入ってしまう感じのものが多いようです。

曲芸の場合は、技が明確で技が一つ一つ決まるとお客さんの拍手があり、また人に隠すようなネタではなく、失敗したらお客さんに確実に分かります。

以上で私たちの考える曲芸のイメージがお分かりいただけただけでしょうか。

ホームページでお二人が持たれている「曲芸魂」という掛け軸？が気にかかります。
この「曲芸魂」という言葉に込められた想いとは何でしょうか。

(ニヤートン)

曲芸魂とは簡単に言うと、曲芸にこだわった意識を持つという事で、このもっと深い意味を知るには、私たちのショースタイルを述べなくてははいけません。

日本ではほとんど30分のショーをしないといけないので、曲芸だけで30分ショーをするにはかなりの集中力と体力が必要なので、どうしても多くの人は大道芸スタイルのショーにしてしまいます。

大道芸では曲芸の技術よりも、お客さんといかにコミュニケーションをとるかが大事で、おしゃべりで盛り上げたりとか凝った演出を中心にしてお客さんとの絡みの部分を長くした方がお客さんに親近感を持たせるには有利です。



しかし、私たちの場合、大道芸というより曲芸を意識してショーをしているので、おしゃべりとか凝った演出ではなく、あくまで曲芸それ自体でお客さんを楽しませたいのです。

演出などに凝りすぎると、曲芸という素材をつぶすこともあるので、私たちはその曲芸という素材をそのまま活かし、純粋に曲芸に対する情熱みたいなものをお客さんに伝えたいのです。

また、私たちは伝統的な曲芸とか正統な曲芸もそれほど意識していませんので、私たちのショーは形にとらわれることのない今風の演出であって、なおかつ演出に凝りすぎない曲芸中心のショーです。誤解して頂きたいのですが、大道芸と曲芸を比較して、決して大道芸を批判しているのではありません。ただ、大道芸と曲芸のショーは本来違うものだと言いたいだけなのです。

最近、曲芸にこだわったショーが衰退しているように思われます。

ジャグリングが大道芸として日本で普及してきたので、昔の曲芸スタイルのショーが消えてきているような気がします。だから私たちは曲芸のよさを伝えるためにも、あえて曲芸にこだわったショーをしていきたいと思いつつ、大道芸の良い部分も取り入れながら、レベルの高い曲芸を伝えたいとも思っています。

今まで私たちのショースタイルを述べてきましたが、曲芸魂という精神を公にすることによって、私たちはさらにその精神を守らなければいけないという意識を強くさせます。だからこそ、こういう精神のさくら組のショーに期待して観に来てくださるお客さんを失望させてはいけないという自らにプレッシャーを与えて日々努力しなければいけませんし、そうすることによってさらに私たちはレベルの高い曲芸ショーが作れると思っています。

今はまだ私たちのショーを観て期待はずれと感じる人もいるかもしれませんが、そういう方を少しでも減らして、さくら組のショーはやっぱり曲芸魂を感じる！と言われるように頑張っていきたいと思えます。

クーピーさんはもともとクラウニング中心のパフォーマンスだったのに、なぜ曲芸を。

(クーピー)

私は、スラップスティックの映画や落語などもともとコメディやお笑いが好きで、この世界に入るきっかけになったサーカス合宿でも、パントマイムやクラウンの演技に惹かれていったんです。芸人を始めた頃は自分なりにキャラクターを活かしたギャグを考えて、どうやったらお客さんを笑わせることができるかと笑いにばかりこだわっていたような気がします。もっとも他にできる芸がなかったせいもあるんですけどね。(笑)

そのうちニヤートンからジャグリングを習い始めました。以前サーカス合宿で3ボールのカスケードだけは習って、なんとかカスケードができるようになったものの、私には向いてないなあ…とっていました。でも不思議なものでニヤートンに習っているうちに、カスケードだけではなく簡単な技もいくつかできるようになっていきました。一つ技ができるととてもうれしくて練習が楽しかったです。そのころからショーにもジャグリングを披露するようになりました。

私のショーのコメディネタは、どちらかというと「ひき笑い、ひき芸」という感じのものが多く、
「押し芸」であるジャグリングをすることによって、ショー全体のバランスも良くなった気がします。

私が芸人になりたての頃、ある先輩芸人の方が「ショーはリズムだ！」と教えてくださいました。まだその頃はよく分かっていなかったのですが、今はなんとなく分かったような気がします。私の場合、ジャグリングによってショーにアクセントができたと思います。

またお客さんに笑いだけではなく、「おお～！すご～い！」という反応と拍手をたくさんいただけることができたので、精神的に気持ちが良くなりました。素直にうれしかったですね。

そのころパントマイムを数年習っていたのですが、パントマイムは私にとっては抽象的な芸に感じて、習っていくうちにだんだんと苦手意識を感じるようになりました。即興は面白くて好きだったのですが、テクニックや作品作りは苦手でした。そのうちにパントマイムを習うことを辞めてしまいました。

曲芸は練習したら具体的にレベルアップしている形がわかるし、技ができればルーティーンを組んでいってそれを披露してお客さんに喜んでもらうことができます。パントマイムはどうやったら上手くなるのか、上手く表現することができるのかというのが、私自身よく分からずしかもマイムがヘタクソだったので結果的にマイムより曲芸に…となったのかと思います。

またニヤートンと一緒にいることでめちゃくちゃ影響受けました。以前サーカスを観にいったときはクラウンが出てくるとワクワクしたのですが、今はクラウンが出てきてもだいたい次の行動が読めることが多いし、素直に笑うことができなくなりました。反対に曲芸の人が出てくるとワクワクして楽しくなります。

それまで興味のなかった(というか知らなかった)JJAの大会や体操の競技会も観に行くようになって、ある意味カルチャーショックを受けました。

一番ショックを受けたのは、1999年に二人で行ったJJAのフェスティバルです。

私にとって初めての海外旅行というのもあるのですが、海外のジャグラーのレベルの高さを実際に感じる事ができてよかったです。なかでもフェスティバルのショーでクリスクレモさんのショーを観る事ができて、とても興奮しました。ショーを観て鳥肌が立ったのはこの時が初めてです。

私は帽子の芸が好きなのですが、クリスクレモさんの帽子の芸はすばらしかったです、それ以上に3ボールジャグリングのスピードとシガーのピルエットのときに飛び散る汗がめっちゃめっちゃかっこよかったです。ショーを観た後は興奮して眠れませんでした。普通のジャグラーはボールの数が多かったりと派手な芸で盛り上げますが、クリスクレモさんは地味だけど普通の人には簡単に真似できない芸の深みがありとても魅力的でした。地味だけど渋いって感じでしたね。私もクリスクレモさんのように鳥肌が立つほどの芸ができればいいなあと思います。

でも曲芸一本で…というには抵抗があります。やっぱり笑いも好きだし、自分のキャラクターを活かせるにはコメディ路線かなあと。私の今のピンショーは、ジャグリング&マジック&ギャグを組み合わせています。よく人に「どんなショーですか？」と聞かれて「ジャグリングやマジックやギャグがあるショーなんですけど」と「ジャグリングショーです！」とスパッと言い切れない、今は中途半端な状態にあります。その反面、さくら組のときは「曲芸ショーです！」と言い切れます。

さくら組はほとんどニヤートンが仕切っているの(笑)、ショー構成もニヤートンが考えます。私の意見も聞いてはくれますが…。さくら組は自分のピンショーとは路線が違っていてもいいかなあと思います。

さくら組のショーに私らしさをどこまで出していけるかが今後の課題の一つですね。

アクロバットを含んだ曲芸中心のショーというのは大変ではないでしょうか。

(ニヤートン)

曲芸ばかりのショーにするのは確かにしんどいですね。

普通のパフォーマーの人は、歳をとるに従って曲芸を少なくして、しゃべりなどを長くしたり曲芸以外のことに挑戦したりしてショーを演じる傾向にあります。

でも私たちは歳をとるに従って、年々レベルアップしてどんどんしんどいショーにしています。確かに歳をとると体力や技の習得が多少にぶりますが、まだまだ私たちは限界を感じていないので、さらにレベルアップしたショーを目指します。

ただ以前、バク転とか宙返りなどの技をやっていましたが、昔の半月版損傷も考えると無茶できないので、そういう芸は今控えめにしています。

でも倒立系の技はまだまだ現役なので、さらにハードなトレーニングをして力技を増やすつもりです。この前のオリンピックの吊輪の演技の力技に何か感じるものがありましたね。ジャグリングのように遊び感覚では決して真似できないしんどさを極めた魅力というか？力技に限らないですが、やっぱり、しんどいことをあえてやることによって、曲芸魂というものがお客さんに伝わると思います。

私たちは本当に好きで曲芸をやっているというよりも、私たちにしかできないショースタイルを確立したいがために今は曲芸をやっています。

オリンピック・イヤーということもあり最近思うことがあります。

例えば新体操など採点競技の「スポーツ」と「曲芸」とは何が違うのでしょうか。

「競技者」と「アーティスト」の違いとも言えるかもしれません。

(ニヤートン)

スポーツは競技なので、他の選手と競い合って勝つのが目的で、体操競技などでは演技した得点で競い合います。

高い得点を出すには、採点基準に従って、自分の演技を構成します。

だから自由演技といっても完全に自由ではなく、この技を入れなければ10点満点にはならないとかあり、ルールにしばられます。

一方、曲芸などを演じるアーティストは決まったルールはなく、本当に自由に演技できます。

それから体操競技ではお客さんのためというより自分のために演技しますし、お客さんに演技を見せるというより審査員に演技を見せるということを強く意識するでしょう。お客さんがいくら喜んで審査するのは審査員なので、演技者はミスのない完璧な演技をし、審査員に好印象を与えなければいけません。つまり体操競技ではお客さんにアピールしたり、ふざけたりすると減点されます。

一方、アーティストの場合、お客さんに演技を見せるので、お客さんを意識して演技するので、ふざけてもミスしても減点などもなく、仮にミスしてもごまかしてしまえば、パフォーマンスとして成立します。

それと体操競技は難度に従って演技をするので、一般のお客さんと審判員の見目は違うでしょう。例えば、体操では開脚で行う技よりも閉脚で行う技の方が難しいので、演技では閉脚の技をする人が多いです。

でも一般のお客さんから見るとその難しさは分からず、逆に開脚の技の方が派手で凄く見えることもあります。そこで、もしアーティストとしてお客さんにショーを見せるのなら開脚の技をするでしょう。わざわざ難しいことをしてミスのリスクを背負わなくて済みます。

ところで、アテネオリンピックの体操競技でこういうハプニングがありましたね。

ロシアのネモフ選手が鉄棒で離れ技を何個も入れた凄く演技をしたのに、得点がそんなに高く出なくて、観客が長い時間ブーイングをしていましたね。ルールに従えば、審査員の点数は正しくて、いくら観客を盛り上げて点数はそんなに急激に変わりません。

僕も本当はネモフの演技にもっと点数を入れてほしいと思ったけれど、スポーツとエンターテインメントは違うんだ！とつくづく思いました。

ですから、「競技者」は審査員のためにルールに従った完璧な自分の演技を見せるものであり、「アーティスト」はお客さんが本当に楽しんでもらえるために自分の演技を見せるものだと思います。

夫婦共にパフォーマーというのは大変珍しいですね。上手くいく秘訣は何でしょう。

(さくら組)

夫婦に限らず、最初からコンビでやられているパフォーマーの方々はよく解散されることが多いですね。

たぶん、ずっと二人でやっている、マンネリとなって他にお互い自分のやりたいことができたりして、そういったことがきっかけで解散してピンで活動するのでしょうか。

でも、私たちはもともと二人ともピンで活動していたので、逆にピンにマンネリ化を感じました。それに曲芸スタイルのショーでは特に二人でやった方が楽でピンよりいい演技ができることに気づきました。



夫婦パフォーマンスの長所と短所について何か思い当たることはありますか。

(さくら組)

夫婦パフォーマンスの長所はたくさんありますが、短所は特にはないです。

ただ、二人で行うショーでは、相方に頼れるという安心感がありますが、その一方、相方がミスすると心配になります。相方のミスは自分のミスでもあるので、次に自分はミスせずに絶対決めないといけないというプレッシャーがかかることもあります。

でも、ピンで行うよりはずっと楽です。ピンで行うショーの場合、一人で全部行わなければいけません。

次から次へと連続で曲芸の演目を行うスタイルのショーでは、アシスタントがいないと見栄えがよくありません。一人で行ったり、来たりして道具を取ったり、引っ込めたりすると、間がよくなく、みっともなく見えたりすることもあります。二人で行えば、そういう問題も解決でき、さらにコンビネーション技もでき、にぎやかなショーにもなります。

チャートン一人のショーでは、どうしてもしんどさをお客さんに感じさせてしまったり、演目や技を出しすぎて演技に余裕がなくなります。

また、しゃべくりでは、クーピーの方がうまくできるので、さくら組ではクーピーにすべてしゃべくりを任しています。

だからチャートンは本当に技だけに集中できて演じることができます。

こういうふうにはぶき、お互いの欠点をカバーし合い、さらにお互いの得意演目だけを強調して演じることができるので、バランスのとれたいいショーになります。

今後のショーの方向性についてお伺いしたいのですが。

(さくら組)

現在、私たちはステージショーを目指していますが、伝統的な曲芸スタイルのステージショーではなく、またホールなどで行うような照明や音楽を使って綺麗に演じるステージショーともちょっと違います。

どの分野に当てはまるのか私たちにもよくわかりませんが、基本的には曲芸オンパレードのショーです。そして、いろんなジャンルのスタイルのショーのいいところだけをとったショーにもしたいと思っています。

つまり、サーカスの雰囲気を少しにおわせ、寄席などで行うような曲芸スタイルのショーにも近く、そして大道芸的なスタイルも少しミックスし、さらに漫才のようなボケとツッコミを軽く加えた他に類のない斬新なショーを考えています。

将来は寄席やホテルのディナーショーや温泉などでの長期公演などでどんどん通用するようなものにしたいです。関西ではそういう場所で正式に曲芸ショーとして認められるレベルになっているのはラッキー師匠のところのザ・ラッキーショーぐらいでしょう。

おかげさまで私たちも最近はそのような方面での依頼が少しずつ増えてきましたので、これからもっと私たちのショーがそういう方面に通用するように頑張っていきたいと思います。

それと二人ならではの芸をもっと強調して、二人でやっている意味をより伝えたいです。今はとりあえず、二人で力を入れている演目はくわえばちでのボールパッシングですが、さらに磨きをかけ、そして最終的に私たちにしか出来ないオリジナルの芸を開発して世界に発表したいですね。

(註1) さくら組 <<http://www.geocities.jp/nekokupi/>>

E-mail <nekokupi@yahoo.co.jp>

コンテンツのひとつ「どこでも倒立」はオススメ。

URLは、<<http://sakuragumi.poke1.jp/dokodemo.html>>

(註2) 天保山ワールドパフォーマンスフェスティバル

<<http://www.kaiyukan.com/market/>>

(註3) ACC <<http://www3.alpha-net.ne.jp/users/accircus/>>

(註4) IJA <<http://www.juggle.org/>>

(註5) JJF <<http://www.juggling.jp/>>

(註6) 神戸ハーバーランド <<http://www.harborland.co.jp/>>

(註7) 静岡大道芸ワールドカップ

<<http://www.daidogei.com/contents.html>>

(註8) ラッキー師匠(ザ・ラッキー) <<http://www1.odn.ne.jp/cbz37980/>>



お知らせ

来年の2月から長野の昼神温泉で一ヶ月公演があるそうです。詳しくはさくら組のホームページに分かり次第掲載されるそうですから要チェック!

早めの編集後記

最近全然ジャグリングに関する活動していないなあ。練習してないし、演ってないし、観てないし……でも皆さんに助けをいただきながらJugPal発行は続けますので、これからもよろしくお願い致します。

9月に仕事でブータン王国に行ってきました。何処にあるかって? 自分で探してね。

海外のどこに行ってもまずサーカスを探すのですが、ここでは商業的なエンターテインメントは無いとすぐに悟り探すのをあきらめました。

とても良い国でクセになりそうですが、入国者数の制限をしたりしていて気軽に訪問することは難しいです。

お土産代わりに写真ですが、山あいにある首都ティンブーの遠景(手前で眠そうなツラをしているのが私)と街にある映画館をご覧下さい。こんな写真しかなくてすみません。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人には一切関係しているものではありません。

ジャグパルはWeb上でも見られますので、紙での郵送が不必要な方はご連絡ください。

WebサイトJugPal: <<http://www.chansuke.net/jugal/>>

編集発行人: 安部保範

住所: 横浜市栄区公田町424-9 (〒247-0014)

見世物広場: <http://www.chansuke.net>

E-mail: chansuke@chansuke.net





ビデオ紹介

Jack of All Trades

いろいろなことをなんでも器用になす万能タイプの人を、英語では Jack of all trades と言います (器用貧乏という悪い意味もある)。ジャグラーにも、ナンバーズ・ジャグラー、芸術家肌のジャグラーなど、いろいろなタイプの人がありますが、Jack of all trades と呼ぶべき多芸の持ち主達も居ます。

このような人達にとっては、同じ観客達に日替わりで違うショーを見せることなど造作ありません。だからといって、どの芸も中途半端になるようなことはなく、観客を驚かせるに足るだけの技と、多様な芸を組み合わせる1+1を3にする知恵を身に付けています。

今回は、Jack of all trades の名にふさわしいパフォーマー達のビデオをご紹介します。

【Charlie Frye's ECCENTRICKS 2】

2004年1月号でご紹介した、マジックと曲芸とギャグのネタ集 Charlie Frye's ECCENTRICKS に待望の続編が出ました。今回もいろいろな芸がてんこ盛りに収録されていますが、「マジック」:「ジャグリング、曲芸」:「ギャグとインチキ」の比率がおよそ6:2:2だった第1集に比べると、うれしいことに「ジャグリング、曲芸」の比率が増えて6:4:1ぐらいになっています。また、曲芸系の芸とマジックが渾然一体となっていた第1集に対し、第2集では曲芸系ルーチンとマジック系ルーチンが分かれており、マジックをしないジャグラーにとって応用しやすくなっています。第1集、第2集ともにDVDになったので、見たいところをすぐ見られるようになりました。解説部分を繰り返し見るのにも、解説を飛ばしてショーとして鑑賞するにも便利です。



まずオープニングでは、ボウラー・ハット(丸帽子)をかぶりケーン(杖)を持って登場し、ケーンの取り回しと帽子の芸の美しさで魅了するとともに、間に挟んだ数々のギャグでしっかりと笑わせてくれます。これだけで完全なルーチンになっており、そのままステージで演じることも十分可能なレベルです。たぶん、チャーリー・フライ自身の営業ルーチンの1つにきわめて近いのでしょう。練り上げられた技とギャグの畳み掛けの妙を味わうことができます。

ルーチンの実演が終わった後は、ルーチンを構成する個別の技の解説が続きます。「ジャグリングは練習あるのみ」ということ言葉による説明はほとんどありませんが、1つ1つの動作をゆっくり行い、さまざまな角度から繰り返し見せることで、とても分かりやすくなっています。間に少し入るマジックもやさしいものです。

中盤では皿を使ったコメディ・タッチのジャグリング・ルーチンが披露されます。投げるだけでなく、ひっくり返したり、回したり、転がしたりで観客を飽きさせず、これまた実戦投入可能なルーチンです。オープニング同様、さまざまな角度から見せてくれるので言葉による解説は不要でしょう。皿を使ったジャグリング・ルーチンの解説は他に見たことがありませんので、挑戦してみたい方にはお勧めです。

20世紀初頭のヨーロッパ・ジャグラーを真似た赤タイツ・口髭姿で登場しビリヤード・ラック(玉並べ棒)の内面にワイン入りのグラスを立てて紐で振り回す小ネタも面白いし、バランス芸も上手です。エンディングでは5クラブを楽々と演じていますからジャグラーとしての技量もかなりのものですが、後でしっかりズッコけてくれるのが「らしい」感じです。

マジックについては、古典的なものにひねりを加えてギャグで味付けしたルーチンがいくつも入っており、見るだけでも楽しいです。ジャグリングとマジックの両方に興味がある人なら頭から尻尾まで役に立つビデオでしょう。マジックのレベルについては、初心者でも練習すればなんとかできそうなものが多かった第1集に比べ、第2集ではテクニックを要するものが増えたように思います。見ていて指がすりそうなお金やカードのフリッシュ(指先の曲芸的な見せびらかし技)もたくさん説明されており、マジック・ショップによる難易度評価では「中上級向け」とされています。

<マジックの内容>

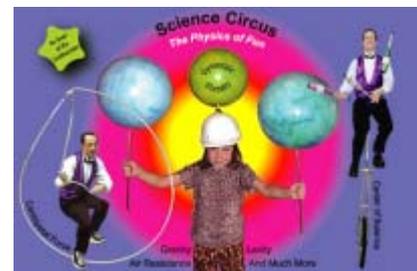
- ・ テーブルに着いてコーヒーを飲む状況でのギャグ・マジック多数。
- ・ 空中からグラスへのコインの取り出し。
- ・ 机に置いたコインがカードの下に集まり、グラスに入っていく。
- ・ ゆで卵スタンドのような器具に眼球が繰り返し出現する。
- ・ さまざまなカード・フラリッシュを交えたエースの取り出し。
- ・ 3シェル・ゲーム(クルミの殻で隠した豆の場所を当てさせるが当たらない)

全編70分で英語のみ、字幕はありません。英語が分からなくても、演技・説明ともに見て理解できる部分がほとんどですが、眼球のマジックや3シェル・ゲームなどは口上の巧みさが分かるとさらに楽しいでしょう。映像の質はDVDのおかげで、さらによくなりました。価格は38ドル(日本向け送料込み)で、講師のサイト<<http://www.charliefrye.com/>>の他、Dube<<http://www.dube.com>>、Serious Juggling<<http://www.seriousjuggling.com/>>などで買えます。また日本のマジック・ショップでも扱っている店があります(フレンチドロップ他)。2004年8月発売。

第1集と第2集の両方を買ってみて、私はどちらも十分楽しめました。とりあえず1つ買ってみたいジャグラーの方には、小ネタの寄せ集めではなく、まとまったルーチンを見られるという点で第2集をお勧めします。以前書いたように、マジック抜きジャグラー専用版があったらいいのにも思いますが、マジックと曲芸の組み合わせの妙がチャーリー・フライの持ち味なので、無理な相談かも知れません。

[Science Circus]

これは教則ビデオではありません。1999年の静岡大道芸にも来日したアメリカ・オレゴン州のジャグラー、リッス・トーマス(Rhys Thomas)が小学生向けに演じている実際のショーの様相を収録したものです。



「科学サーカス Science Circus」という題名が示す通り、単なるジャグリング・ショーではなく、ジャグリングや曲芸で楽しませながら、それらの芸を成立させている物理法則をやさしく説明する、学校・博物館向けのショーです(日本でも同じ趣旨のショーが、名古屋市科学館において「科学演芸」として企画・開催されています)。

物理法則の説明などというと堅苦しく聞こえますが、映像を見るととても面白く、約1時間のショーの間、観客の子供達からは拍手と笑いが絶えません。高難度のジャグリング技こそ出てきませんが、幅広い芸に熟達したリッス・トーマスの演技には隙やドロップがまったく無く、ジョークやギャグを混ぜたおしゃべりを続けながら、さまざまな技をテンポ良く繰り返し出して観客を魅了します。失敗や間の悪さで観客の注意を逸らしてしまうことが無いからこそ、子供達を退屈させず、多少理屈っぽい話でも理解させることができるのでしょう。この滑らかさ、危なげのなさとはただ者ではありません。

また、ただ面白いだけでなく、観客のコントロールのうまさにも感心させられます。観客は小学校3,4年生ぐらいでしょうか?曲芸とギャグでドカン、ドカン盛り上がった子供達がジャンглの咆え猿のごとく興奮し始めると、それを巧みに鎮め、すかさず易しい言葉で物理法則を説明し理解させます。芸を見せるだけでなく、助手を募ったり、以前に説明した内容の応用問題を出したりして、子供達が自発的に参加するよう働きかけることも忘れません。生徒達が夢中になって演技に見入り、説明をきちんと理解しているのは、質問に答えようと林のように手が挙がる様子からも明らかです。リッス・トーマスは、プロ・ジャグラーになる前は中学で英語とジャーナリズムを教えていたこともあるそうで、その経験が生きているのでしょう。

さて、実際のショー内容を覗いてみましょう。まずは、ボール・ジャグリングで観客の心をつかみ、ボールが重力に引かれて落ちてくるからジャグリングができること、重力は地球の質量に由来することを説明した後、ボールを低く高く投げ分けて、重力による等加速度運動を実感させます。物体が落ちる速度は物体の重量とは無関係であることを教えるため、ガリレオがピサの斜塔で行なった実験をボーリング・ボール、ピンポン・ボール、ビーンバッグのジャグリングで再現してみせるところはさすがです。



エッセイ

【エノサン】

安部さんから寄稿を頼まれて最初に頭に浮かんだことは文才のない私に何故？ということとジャグリングの腕イマイチだしな～と言った感想でした。

続いて思い浮かんだことは私に書けることって何だろう？

直ぐに浮かんだのが年齢、なんと私は今年で53歳、人生の折り返し点をとうに過ぎ、敦盛ではないが人間五十年下天のうちに比ぶれば～、とくればすでに死んでいてもおかしくない歳ではないか！

そう言えば若いジャグラーやパフォーマーの方々から時々聞かれるのが、年齢と幾つ位まで我々の仕事って出来るものでしょう？という質問が多い。

人それぞれじゃないの？などと答えてはいるが将来に漠然とした不安を抱いている方が多いのかな～などと日ごろ感じている。

従って今回の寄稿にあたって年齢とジャグリング、そして私の感じていることを書いてみます。



年齢とジャグリング

そもそも私は四十を過ぎてからジャグリングをはじめた。何のために？無論、ジャグリングなど知る由もなくまったく無縁の存在であった。そのころの私は”笑い”というものにとっても興味を持ち始めていて、そんな時にクラウンと言う存在を知り、クラウンスクールに通い始めたのがきっかけでジャグリングとも下手なりに十年以上のお付き合いをしている。

どうしたらジャグリングが上手になれるのだろう？

高齢者は、一に練習、二に練習、三、四が無くて五に練習。ふる～い表現でごめんなさい！ただ残念ながらそれ以外には無いようです。お年寄り向けのアドバイスとしては、私も極力心がけていることです。柔軟体操と筋トレは忘れずに、そして人それぞれセンスや勘、年齢その他個人の身体能力により早い遅いはあっても練習なしに上手になれる方は存在しないでしょう。

それと日常生活にあまり使用しない筋肉やイメージ総動員して体に覚えこませることが第一で、ジャグリングでよく言われることですが、左手は二倍練習しろ、曰く左が出来れば右は自然に出来るようになっていく！

(注意)老人は三倍、集中(丹念に)、若者は無視！マイペースを守り、続けることが全てです。

私なりに大切だと感じる所がもう一点。

ジャグリングは道具を使う所がポイントであり、使い込んで自分の体の一部であるかのような所までいければ最高！その為には道具の重さを常に感じる事が大切で、その事が道具をして自分のコントロール下にある事の証である。

高齢者並びにこれから高齢者になられる方々への効用と薦め

何時どこでも誰でも出来、その方のレベルにあった練習が可能であり、又、上手い下手、進捗度合やサボり、全てがこれほど明確に見えるジャグリング(スポーツ)は無いのではないのでしょうか。

リハビリや身体機能の向上、日々の練習は自分自身の身体との対話など、続けることでより多くのことが見えてくる、とても素晴らしい趣味になる事と存じます。



エノサン：

Webサイト <http://www007.upp.so-net.ne.jp/enosun/>

メール enokida@ta2.so-net.ne.jp